

DISCOVERY

SHIKOKU ZAIMU KYOKU

シコク発見

2023, Sept.

価値のわかる
人に届けたい



染匠 吉野屋 四代目
OHNO ATSUSHIKO
大野 篤彦

染匠 吉野屋

■address(店舗)
香川県仲多度郡琴平町旭町286番地
■Website
<http://kotohirayoshinoya.jp/>



企業紹介

来春、5年ぶりに開催される予定の四国こんぴら歌舞伎大芝居。昭和60年から開催され、全国から歌舞伎ファンが訪れる春の風物詩となっています。色鮮やかな幟(のぼり)を染めているのが、大正元年創業の「染匠 吉野屋」です。伝統を継承しながらも新たな挑戦を続けている4代目・大野篤彦さんに、香川大学のインターンシップ生4人と共に取材しました。

手間を惜しまず、一枚一枚。

讃岐のり染



工房を訪問させていただいた私たちを、製作中の法被が^{はっぴ}出迎えてくれました。この法被は、香川県伝統的工芸「讃岐のり染」という手法で染められています。



もち粉・石灰・食塩・ぬか・水で糊をつくります。染め上げるデザインの線の上にこの糊を置くことにより染料が混ざること避け、染め分けることができます。筒に入れ絞り出すように糊を置く方法を「筒引き」、型紙を使う方法を「型置き」といいます。天気や湿度に加え、糊の硬さや量、置くスピードで染め上がりが変わってくるので、職人の腕が試されますね。

琴平町では、一部の地区を除き、祭りの日に着る法被を個人個人が所有しています。1着あれば長く着れるし、襟を付け替えればきょうだいや子ども、孫へと受け継ぐこともできます。

糊を置いて、染料を刷毛で染めて乾かして、糊を落としてまた染める…と、色使いが多い程作業工程が多くなります。琴平町では、地域の伝統行事であるお祭りで着る自分専用の法被を、職人が伝統技術で作ってくれるんですね♪



職人の価値が詰まった販売価格。



先ほどの法被だと、販売価格は3万円程。高いと感じるでしょうか？

法被は年に1回くらいしか着ないため、高いと感じるかもしれません。しかし、讃岐のり染の手法で何度も何度も繰り返し手作業で染め上げていきます。職人の技術が詰まった1着を作るのにおよそ3週間かかります。

販売価格だけをいきなり提示すると「高い」と渋られることもありましたが、作業工程や価格の内訳を丁寧に説明すると理解してもらえたということがありました。

量産ではない手作りの製品です。生み出されるまでの過程にも目を向けていただきたいです。



用途をしっかりと把握し、ニーズに応じた製作。

吉野屋では、幟や法被のほか漁船の大漁旗、店舗の暖簾^{のれん}なども扱っています。Instagramには、色鮮やかな幟や暖簾の写りが掲載されていますね。

暖簾を作る際は、使われる場所、場面をヒアリングしています。太陽の下に出すことが多いなら紫外線に強く色褪せしにくい「顔料」を、店内で使用するなら擦れに強い「反応染料」を使って染めます。店外に掛ける暖簾が多いため、顔料で染めることが多いですね。

反応染料で染めると1年半くらいで色落ちしてしまうものの、顔料で染めると約7~8年は持ちます。染物のプロとしてニーズに応じた染め方で製作しています。

…染物屋からすると、顔料で染めると仕事が減っちゃいますけどね（笑）



@kotohirayoshinoya



KOTOHIRAYOSHINOYA



— 伝統芸能 × 伝統工芸 — を身近に。

KON BAG ・ コラボ商品



環境の変化に対応しながら染物を身近なものに感じてもらえるよう、近年では普段使いの身近な製品も発売中です。



他にも、BEAMS JAPANとのコラボなど多数あり！



KON BAGは、バッグ専用に染め上げた四国こんぴら歌舞伎大芝居の幟を自社でトートバッグやショルダーバッグに仕立てています。日本の伝統芸能である歌舞伎、それに華を添える伝統的手法で染めた歌舞伎幟。伝統芸能と伝統工芸の両方を身近に感じてもらいたいと思っています。

新型コロナウイルス感染症により、四国こんぴら歌舞伎大芝居も4年連続の中止となりました。もともと、歌舞伎の幟頼りではこの先の経営は成り立っていかないという危機感があり、新商品の展開等によりコロナ禍も正常に経営が成り立ったことは、手ごたえを感じるきっかけとなりました。

地元、琴平で地域ブランドを。

正藍染



新商品の展開という点、近年では「正藍染」という手法も取り入れています。

“ジャパン・ブルー”って聞いたことありますよね。このブルーは、藍染の色のことです。

藍染とは、日本で伝統的に行われてきた藍（タデ科イヌタデ属の一年生植物）を用いた染色技法のこと。紫外線防止や抗菌作用等があるため、昔の人は衣服を藍で染めるなど、生活の一部として愛用してきました。まさに日本を象徴する存在です。

地域の新たなブランドになればとの思いから、当社も過去には実施していた藍染を復活させようと決意しました。そして、藍染のなかでも古来の製法であり、色持ちに優れている「正藍染」に着目し、栃木県の職人のもとで修業しました。

「藍」といえば徳島県が産地というイメージが強いですよね。徳島から藍を仕入れることもできますが、せっかくなら原材料も地元・琴平で生産の方が面白いと思いました。そこで、町内の複数の農家と協力して、原材料である藍の栽培から染色までを町内で行う仕組みづくりをしています。今は、町内の障がい者施設とも連携し、藍を育成しています。当社の取り組みで町内に新たな仕事や雇用が生まれるのはやはり嬉しいですね。

正藍染と言えば琴平町と言ってもらえるような、地域ブランドに育てたいです！



▲藍の葉を発酵させて菜（すくも）を作る



▲藍汁をためておく 藍甕（あいがめ）



▲大野さんの爪は藍色に。まさに職人の手！



色むらなく、美しい色に仕上げるのは染物職人の腕の見せ所だと語る大野さん。今回のインタビューで特に印象的だったお話があります。



今後は正藍染の商品の販売を拡大させていくのでしょうか。



実はそれはあまり考えていません。

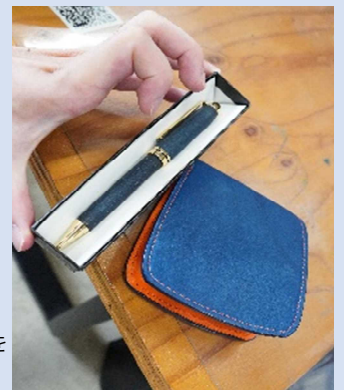
正藍染は手間と時間がかかりますし、何より**価値を分かってくれる人に対して作っていきたい**との思いがあります。量産するのではなく、手作業で何度も染め上げている1点1点の商品に対してしっかりと価値を分かってくれる人の元に届けたいと思っています。



▲藍染は何度も何度も染料を重ねていくことで深い色合いに仕上がる



▶革製品に傷がある場合、“生きた証だ”と思いを馳せる大野さん。「どういう経緯でこの傷がついたのか、考えてみると面白いよね」



琴平町への想い。



大野さんは個人としても、琴平町のまちづくりについて様々な集まりやプロジェクトに参加されています。そんな大野さんに、琴平町への想いを伺いました。



琴平町にこれからどうなってほしいですか？

琴平と言えば観光で盛り上げる、とイメージする人が多いと思いますが、その一方で、その観光地で日々生活している人がいます。

地域の良さは、地域で実際に暮らしている人だからこそわかる面もあります。だからこそ、観光客や移住者を受け入れながらも、**ここで暮らしている人達が形成するコミュニティをしっかりと残していくことが大切だと考えます。**

私は「自分の周りの人が幸せになってほしい」という気持ちでいます。正藍染の藍の栽培から染色まで琴平町内で賄うのもその思いからです。一人ひとりが自分の周りの人の幸せのために行動できれば、やがてそれが地域全体に広がり、将来を担う子どもたちも「この町が好きだ」と郷土愛が芽生えるものと思っています。

今後は、身近な事業者が様々な課題を抱えているので、それを解決するために合同で会社を立ち上げようと検討しているところです。



伝統を継承しながらも、新たな取り組みに挑戦し続けている大野さん。そのまっすぐな眼差しと発言には、「価値が分かる人に対して作りたい」という職人の誇りと、「周りの人が幸せになってほしい」という温かなお人柄に溢れていました。



取材を終えて…

「物の価値を分かっている人は、ちゃんとしたところに行きついている」と聞いて、日本産の食材などを選んで買っている人は、このような考え方をしているのだろうと感じました。「価値を分かってくれる人に」という考え方がこれから人口減少を迎える日本で生産を続ける上で、大事なことだと思います。（香川大学経済学部 H）

この仕事に対する考え方だけではなく、政府が進めている「地方創生」についても深い考えをもっておられ、実際にそれが必要とされる地域で働いているからこそわかる意見はとて印象に残りました。（香川大学法学部 N）

伝統を守りながら、新しいことに常に挑戦されている姿勢に刺激を受けました。材料を提供されている農家さんや、昔から讃岐のり染に愛情を持っている琴平町の方々など、讃岐のり染という伝統を引き継ぐ中でかかわりを持ってこられた人々との関係をとて大切にされていると感じました。（香川大学法学部 T）

価値のわかる人へ届けたいという思いを聞いて、それだけの時間や手間、思いが込められているのだと感じました。新たな事業を始めるなど、常に挑戦を続ける大野さんの熱意に感銘を受けました。（香川大学経済学部 B）

「価値をわかる人に対して商品を提供したい」という大野さんの思いをお聞きし、原材料からすべてこだわりぬいて、本気で藍染に向き合っているからこそ出てくる考え方が自分には発想できないものでとても印象に残りました。大野さんの魂を込めて作られた物たちが、琴平町をはじめ多くの場所で多くの人から愛され続けてほしいなと心から思います。（管財総括第一課 三木里桜）

伝統や歴史を尊重しながらも、染物屋という強みを活かし、新しい事業に挑戦される姿に感銘を受けました。日ごろから交友関係を広げ、新しい事業も一人で始めるのではなく、周りの方を巻き込んで盛り上げていく姿に、「地元、琴平で地域ブランドを。」という強い想いを感じました。（統括国有財産管理官 田辺貴洋）

